

第15回全国高等学校ビジネスアイデア甲子園 受賞作品紹介

今年度は節目となる第15回を迎え、全国164校から創設以来最高となる8,483件ものアイデアが寄せられました。その頂点を決める最終審査・表彰式を、平成28年12月17日(土)、大阪商業大学にて開催しました。当日は最終審査にノミネートされた6件のプレゼンテーション審査が行われ、グランプリをはじめとする各賞が決定し、学校賞10校の皆さんとともに表彰式を執り行いました。また、江崎グリコ株式会社グループ広報部長 江崎記念館館長 岡本浩之氏、グループ人事部キャリアサポートグループ長 相川昌也氏を招聘し「挑戦し続けるグリコの創意工夫」をテーマに記念講演を行いました。表彰式後には交流会を開催し、江崎グリコ株式会社にご協力いただき、ポッキーやビスケットなどを使用したプログラミングを学習し、全国から集まった高校生同士が交流を深め大変有意義な機会になりました。



みなさま
おめでとうございます!

★ グランプリ ★



愛知県立豊橋工業
高等学校 3年
グループ名「じょーらん」

吉田 純さん 成瀬 三志郎さん

受賞作品タイトル 「キャッチリトリ」

ちりとりでゴミを取ろうとしても細かいちりが取り切れない。掃除当番をしていた時のそんな経験から、取り残さないちりとの考案に取り組んだ。

まず観察の結果、原因は床とちりとの先端の間に隙間ができるためと判断。通常、ゴミをとる時は取っ手を少し上げて床との間に角度をつけるが、最適角度は24度と割り出したうえで、先端に薄いフィルムを貼って凹形や凸形、波形などさまざまな形状で実験を繰り返した。

その結果、内側に湾曲した形状が、傾斜角24度を維持できるうえ、両側からこぼれないため、最も取りこぼしが少ないことが分かった。さらに、プラスチック製のちりとりは射出成形で作られているため、型を作って生産すれば安く大量に作れると、製造コストにまで言及した。



★ 学校賞 ★

- 富山県立富山北部高等学校
- 岐阜県立岐阜商業高等学校
- 愛知県立一宮商業高等学校
- 京都府立京都すばる高等学校
- 大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校
- 大阪商業大学高等学校(大阪府)
- 兵庫県立伊丹高等学校
- 岡山県立岡山東商業高等学校
- 岡山県立倉敷商業高等学校
- 松江工業高等専門学校(島根県)

※都道府県順

学校賞受賞のことば

兵庫県立伊丹高等学校 佐藤 司先生

昨年度、文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、グローバルビジネスリーダーの育成に取り組んでいます。その一環として、今回初めて1年生の320人全員が応募しました。生徒にとってはビジネスを考えるのは難しかったと思います。グランプリを受賞した作品はポイントが明確で十分検証しており、素晴らしいです。次回以降も応募したいと思います。

★ 準グランプリ ★



広尾学園中学校・高等学校 1年
白川 和希さん

受賞作品タイトル

「やわらかプラグ」

コンセントに差し込みっぱなしのプラグにはこりがたまり、トラッキング現象によって発火、火事につながるというニュースを見たことで、既存のプラグに問題意識を持った。自宅を調べるとコンセントが20カ所もあり、中には手が届かない所にもあることがわかったという。

プラグを差し込んだ時にコンセントとプラグの間に隙間がなければ、この現象は起きないと思いついて考案した。軟らかくて低反発な素材でプラグのカバーを作り、カバーを大きくすることで、しっかり差し込んだ時に軟らかい素材がコンセントごとと壁に密着し、ほこりが入るのを防ぐ構造になっている。



富山県立富山北部高等学校 2年
古瀬 愛さん

受賞作品タイトル

「棚付き買い物カゴ」

スーパーで陳列順に品物を買ってカゴに入れていくと、最後に並んでいるのが飲み物。重いペットボトルを上に乗ると、軟らかい野菜やパンが潰れてしまう、入れ直すのも面倒。そこで考えたのが、取り出し式の棚をかごにセットすることだった。

アクリル板をかごの幅の狭い方の外側にぶら下げるだけ。ペットボトルを乗せる時は、かごとの接点を基点に回転させる。ストッパーを付ければ板が浮いた状態で止まり、別の商品にボトルの重量がかかることはなく、アクリル板に折り返しを付けておけばボトルがぐらつかない仕組みになっている。

★ 審査員特別賞 ★



大阪府立登美丘高等学校 1年
米田 脩人さん

受賞作品タイトル

「グラウンドの整地用機械」

部活の後で大勢の人でトンボを持ってグラウンドを整地するのは時間もかかり面倒。機械が整地している間に他の片づけが同時にできると考えたのがアイデアのきっかけ。

バーベキュー用の網とブラシを箱型の機械に取り付け、タイヤの回転数で距離を測り、端まで行くと反転する。それを繰り返すことで全域を整地する自動掃除機のようなイメージ。導入することで、整地の時間が削減でき、練習時間が増えサッカーが上手くなることなどをメリットにあげた。



岡山県立倉敷商業高等学校 1年
宮田 幸佳さん

受賞作品タイトル

「シャパシャパ筆たく機」

書道が苦手とする理由に汚れることや手間、筆の洗いがわからないなどがあり、その悩みを解決するために簡単にきれいに洗えるものを考案した。

筆を挿し込むゴム製のキャップをペットボトルに装着し、水を入れて振るだけ。汚れが飛び散らず、時間の短縮につながる。さらに洗った後は水切りもでき筆を逆に挿し込むことで、乾かすスタンドになる。書道の後片付けのわずらわしさを解消と同時に、水の使用量が半減するという点で環境にも配慮したアイデア。



徳島県立辻高等学校 3年
グループ名「中川 麗」
寺尾 麗さん(写真左)

中川 桃華さん(写真右)

受賞作品タイトル 「ロケット化粧品」

化粧品は種類が多いためメイクポーチがかさばると探すのに一苦労した経験から、小型化した化粧品をロケットペンのように、1本にまとめるアイデアを考案した。

化粧品に必要なアイテムがコンパクトにまとまっていて、初めての人でもわかりやすく、小型化することで使用期限を過ぎた化粧品の廃棄頻度を減らすことができる。販売者にとっては新規顧客の開拓に加え、特有の形状から顧客が他のメーカーに移り難くなる点などがメリット。

記念講演



江崎グリコ株式会社 グループ広報部 部長
江崎記念館 館長 岡本 浩之氏



江崎グリコ株式会社 グループ人事部
キャリアサポートグループ長 相川 昌也氏

講演タイトル 挑戦し続けるグリコの創意工夫

「グリコ」が生まれたきっかけは、創業者の江崎利一が地元佐賀の浜で漁師がカキを煮ているのを見たことです。煮汁を調べたところ、グリコーゲンが高濃度で存在することを確認。腸チフスにかかった長男にグリコーゲンのエキスを飲ませたら回復したことから、お菓子に入れることを考えました。

商品化に際しては、その頃お菓子の代名詞だったキャラメルと差別化するため、箱を赤にして、今も続くゴールインマークを付け、形もハート形にしました。「一口300kcal」のキャッチフレーズも斬新でした。1922年に大阪に出てきた後もおもちゃを付けるなど工夫を続け、これまでの生産量は55億個にのぼります。

江崎グリコは置き菓子という新しいコンセプトの「オフィスグリコ」を売りだし、大きな柱に育っています。会社の事務所にお菓子を入れた専用ボックスを置いてもらい、食べた分だけ代金を箱にいれてもらうシステムです。社内の強い反対の声を入念にサーチと準備で押し切って始めたのですが、30~40歳代の新しい顧客層を振り起こし、代金回収率は95%にのぼります。

新しいことをやろうとしたら、人に対して熱くなれ、働きかけを惜しまなくなります。そういう人が複数いれば組織を巻き込む力になります。困難に直面したら、ぶれない軸足に立ち、チームでとことん議論すること。オフィスグループはそうした取り組みで、第1回日本サービス大賞 優秀賞を受賞しました。

審査講評



審査委員長
大阪商業大学経済学部 柴田 孝准教授

最終審査作品は、生活シーンに密着し、見過ごされがちな点を掘り下げた作品が多かった。プレゼンもよく準備されていた。グランプリのキャッチリトリは真面目に考えたのが面白い。どうすれば課題をクリアできるかを粘り強く考えたことがよく分かった。準グランプリの2点も試作を重ねて実用化に結びつけた点が良かった。ビジネスアイデア甲子園はコトやサービスも対象にしており、今後、こうしたジャンルの作品も出品されることを期待したい。

応募数の推移

| 回数 | 応募作品数 | 学校数 |
|------|---------|--------|
| 第1回 | 597件 | 22校 |
| 第2回 | 1,296件 | 40校 |
| 第3回 | 2,398件 | 58校 |
| 第4回 | 3,775件 | 91校 |
| 第5回 | 3,309件 | 93校 |
| 第6回 | 4,374件 | 113校 |
| 第7回 | 4,762件 | 120校 |
| 第8回 | 5,832件 | 138校 |
| 第9回 | 5,702件 | 140校 |
| 第10回 | 6,604件 | 158校 |
| 第11回 | 7,294件 | 184校 |
| 第12回 | 6,189件 | 160校 |
| 第13回 | 8,109件 | 176校 |
| 第14回 | 7,475件 | 151校 |
| 第15回 | 8,483件 | 164校 |
| 合計 | 76,199件 | 1,808校 |

全国高等学校ビジネスアイデア甲子園 特別企画

大阪商業大学では、起業教育の一環として、ビジネスアイデア甲子園のほか、全国の小中高の先生を対象にした「起業教育研究会」など、研究や情報交換などに幅広く取り組んでいます。「第15回全国高等学校ビジネスアイデア甲子園」の最終審査・表彰式を前に座談会を開催し、起業教育研究会の企画委員を務める近畿の高校の先生方に、ビジネスアイデア甲子園をテーマに各校での取り組みや成果などを語り合っていました。



「ビジネスアイデア甲子園」の成果とは

起業教育研究会の委員ら語る

キャリア育成の道しるべ

柴田: ビジネスアイデア甲子園は起業教育の取り組みの一環であり、またキャリア選択への基礎的な人間力や、職業観を育成していく、という意味ではキャリア教育でもありと考えています。ビジネスアイデア甲子園の活用の仕方や、高校生への影響など教えてください。

貴島: ビジネスアイデア甲子園は、教科書で学んだことを試す重要な場になっています。高校生ならではの斬新なアイデアを、とよく言われますが、いきなり出るわけではありません。最初のアイデアを生かしつつも、ビジネスプランとするにはまず裏付け、根拠が必要で、情報を集めることに尽きます。コンテストとなればなおさらで、その辺を補足させていきます。いわゆるアクティブ・ラーニングになっています。

外部の評価自信に

谷口: ビジネスアイデア甲子園を取り入れることで、日常生活の中での「4F」=商品やサービスに対する不満・不足・不十分・不便といわれる気持ちは、少しずつできてきているように感じています。さらに、外部の社会人の方に評価されることをとても生徒たちは喜びますし、自信につながっているように思います。最近では最終審査でのプレゼンテーションも評価対象になっていますし、事前指導や、事後指導などでいかにブラッシュアップしていくかが課題と考えています。

「やってやる」と諦めず

谷口: 審査する側として、内容的には過去15年間でさほど大きな変化はないように感じています。むしろ私たち大人の側がそういうアイデアを評価できているのか、最終審査に残らなかった中に、ものすごいタネがあるかもしれないと、いつも危惧しています。ただ言い訳のようになりますが、これからは一回失敗してつぶれるような人間ではダメ。何回でもチャレンジして、たとえアイデアを否定されたとしても、「俺がやってやる」と奮い立てるかどうかが。またその時に皆がついてくるようなリーダーシップを発揮し、最終的に活躍してくれることを願っています。

柴田: ビジネスアイデア甲子園に参加する高校生たちへのメッセージをお願いします。

谷口: 最終目標をイメージすることが大切だと思います。例えば本校周辺の地域課題をテーマにいろんなアイデアを出させて実現可能かどうかを検討させていますが、過疎化が進む地域の活性化なのか、生活を便利にするものなのか、どういう方向性でいきたいのか、目標設定がまず必要です。さらに自分たちの今までの知識や判断基準について、立場を変え、相手の立場なら「こういう見方もあるんだ」と知るきっかけにしたいと思っています。

主体性が身につく

貴島: ビジネスアイデアを考えることは、世の中の課題に目を向け、他人事を自分事に変えていくきっかけになると思います。自分たちの問題として「自分事化」する力を身につけ、将来、彼らの人生で花開いてほしいと考えています。特に、今後は日本だけでなく、世界中どこにでも課題はあるという発想も大事でしょう。そして、何かを作り出すことに喜びを感じる人になってほしいです。

谷口: 今の子供たちは、考える力がないのではなく、考える癖がないのだと思います。習慣づけが重要です。やはりまず何か「やりたい」という思いが大事で、次にその夢をどうすればいいかです。そして、何を学ぶべきか考えた先に、この大学があればいいのですが、もちろん違っても構いません。「やるかやらないか迷ったらやる」が本学のモットーで、高校時代はいろんなことに首を突っ込んでみてほしい。世の中を良くしようとチャレンジする意欲が根底にない限り、世の役に立つ人物とはいえません。日本から世界に広がってほしいですね。

プロフィール



大阪商業大学 谷岡 一郎 学長
専門は犯罪学、キャンブル社会学。「科学研究とデータのからくり」(PHP新書)、「こうすれば犯罪は防げる」(新潮選書)など。



奈良県立五條高等学校(奈良県五條市) 谷口 達之 輔 先生
商業科(1学年約40人)と普通科(同約240人)のほか、夜間定時制、農業科のある質名生分校がある。



京都府立京都すばる高等学校(京都市伏見区) 貴島 良介 先生
商業系の企画科(1学年80人)・ビジネス探求科(同40人)・会計科(同120人)と、情報系の情報科学科(同80人)からなる専門高校。



大阪商業大学経済学部 柴田 孝准 教授
専門は国際経済学。特に水産資源に関する多国籍交渉などが研究テーマで、開発経済学や貿易論も担当。起業教育委員会委員長を務める。

起業教育研究会とは

起業教育研究会は2002年にビジネスアイデア甲子園が始まったのを契機に、翌03年2月に発足した。先生同士が情報交換を通じ、起業教育の方法論や教育成果について理解を深めていくのが目的。毎年8月には、全国の小中高の先生を対象に公開講座を開催。企画・運営は本学の教員と、近畿圏の高校教員で組織する企画委員会を中心に進めている。

今年度は「アクティブ・ラーニング」をテーマに実践報告などを展開。アクティブ・ラーニングとは討論や意見発表を通じて主体的に課題を探究する学習手法で、知識の定着が深まり、学習意欲を高める効果があるとされる。起業教育と結びつくことで、「アントレプレナーシップ(起業家精神)」の育成や、キャリア教育として生徒の成長を促すなど期待されている。

寄稿

ビジネスアイデア甲子園は1年生の共通課題として取り組んでおり、2015年度は本校から準グランプリが選ばれ、学校賞もいただきました。生活における不便や不足などを把握することはもちろん、市場を知ることや高校生独特の視点と、幅広い年齢層の視点を考えることで視野を広げることにつながっています。日ごろから思いついたアイデアをメモするようになり、素朴な疑問に対しても好奇心旺盛に取り組むようになりました。

また、ターゲットなどを細かくイメージし、利便性や

学校賞受賞



大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校(大阪市天王寺区) 大中 真太郎 先生
グローバルビジネス科(専門学科、1学年約280人)として2012年に開校。

収益性をアピールするように、1枚のプリントに文章化していただけても、非常に難しい作業です。自らの考えを形にしていくことで主体性を身につけ、発信する能力に磨きをかけていくことができます。今後、ビジネスの担い手となるには、自由な発想の中から市場に合う商品やサービスへとブラッシュアップしていく力や、起業家精神がさらに必要でしょう。ビジネスアイデア甲子園の応募で、そのような多くのことを気づききっかけになってほしいと願っています。

TOPICS

応募アイデアが商品化されました!

「全国高等学校ビジネスアイデア甲子園」に応募されたアイデアを基に、かがみずで足でもスイッチが操作することができる扇風機「あしもとスイッチ fan」が商品化されました。

発案者は愛知県立豊橋工業高等学校に通っていた須田柊一郎さん。ある時、足でスイッチを操作して、母親から注意されたことをきっかけに生まれたアイデアで、在学中に1号機を制作したものの、安定性や耐久性において改善点が残ったまま卒業。その後、須田さんの意思を受け継いだ後輩たちが改良して2号機を作ったところ、扇風機でトップクラスのシェアを持つメーカーの株式会社山善の目にとまった。

足でも操作できるという発想に加え、かがみずで操作するためシニア層に腰への負担がなく使用できるという点などに魅力を感じて商品化。扇風機の台座の先端にスイッチがついているから、つま先でポンと押すだけ。両手がふさがっていてもスイッチ操作できることが特長。2016年4月に全国のホームセンターや家電量販店、インターネット通販で販売がスタートしました。

「全国高等学校ビジネスアイデア甲子園」に参加した高校生のアイデアが商品となり、またひとつ社会に羽ばたいていきました。



最終審査・表彰式を大商大生が運営しました!

「大商大ビジネス・アイデアコンテスト」などの大学生生活の経験をいかし、学生9名が最終審査・表彰式を運営しました。大学生が運営に携わることで参加高校生が大学生と交流する機会になりました。

学生スタッフのみなさん



